

392 ^{133}Xe を用いた肝動脈、門脈血流量の新しい測定法の開発

(第2報) 肝動脈塞栓療法及び肝切除の適応決定に関する検討

安原美文, 村瀬研也, 福井聡, 森田浩一,
美濃直子, 石川元正, 最上博, 石根正博,
浜本研(愛媛大 放)
宮内聡一郎, 赤松興一(愛媛大 3内)

肝動脈塞栓療法(TAE)や肝切除の適応決定には、肝細胞を灌流する有効肝血流量を知る必要がある。演者らは、腹部血管造影時にカテーテルより ^{133}Xe を注入し、有効肝血流量を測定したが、その際に、バルーンカテーテルを用いて肝動脈血流を中断することにより、門脈血流量を分離して測定する方法を開発した。非肝疾患6例、慢性肝炎10例、肝硬変30例を対象とした結果では、総肝血流量は非肝疾患群で873ml/min、肝硬変群で486ml/minと約1/2に低下し、門脈血流量も同様であった。また、TAE及び肝切除予定例について、門脈血流量と塞栓及び切除量との関係を検討したところ、TAEに関しては、門脈血流量が200ml/minでは肝の50%の領域に対して可能だが、100ml/min以下では禁忌と考えられた。

393 食道静脈瘤硬化療法に対する経皮的R I 門脈造影の意義

日原敏彦、内山 暁、藤本 肇、菊込正人、
可知謙治、斉藤吉弘、林 三進(山梨医大放科)
荒木 力、新井誉夫(同放部)、
藤井秀樹(同一外)、山本安幸(同一内)

$^{99m}\text{Tc-O}_4$ を経皮的に脾内に注入することにより、食道静脈瘤硬化療法前後の血行動態の変化を検討した。対象29例中硬化療法前後で施行されたのは15例であった。

R I 注入開始と同時にコンピュータ処理装置に収録し、関心領域を肝全体と冠状静脈に設定して血流比を観察した。

硬化療法施行例で食道静脈瘤が改善した場合、血流比は低下傾向にあったが、変化の乏しいもの、上昇するものも認められた。上昇するものでは、硬化療法前に血流比が高い傾向にあった。また、血流比と胆汁酸値は硬化療法前後で同様に変動したが、胆汁酸値は約1週間で前値に戻っていた。また、硬化療法後、既存側副路の新たな描出を認める症例も観察出来た。